

下吉井式土器の終焉

—東京都井出南遺跡出土土器を中心に—

谷 藤 保 彦

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| 1. はじめに | 4. 下吉井式終焉土器の変容の在り方 |
| 2. 下吉井式土器の変遷と編年、そして花積下層式 | 5. おわりに |
| 3. 井出南遺跡第2地点出土土器 | |

— 要 旨 —

縄文時代前期初頭の関東地方には、いくつかの地域差が生じていたことが、これまでの土器研究から知られている。静岡県木島遺跡を標識とした木島式土器が駿河湾沿岸を中心として南関東にまで分布域を延ばし、神奈川県下吉井遺跡を標識とした下吉井式土器は神奈川・東京・埼玉・山梨域を中心に分布域をもち、花積下層式でも古い段階は群馬県を主とした関東北西部に分布する。そして長野県では塚田式が主体をなし、群馬県との県境付近では両土器型式が共存するという実態は、多くの遺跡で出土した土器が語っている。そうした地域差的な土器型式の分布は、時間の経過と共に変容し、比較的似た土器文様の土器が広く分布するようになる。それが花積下層の新しい段階(花積下層Ⅲ式)であり、その後の二ツ木式を経て関山式へと変化して行く。そうした変化・変遷していく土器型式の一つである下吉井式土器の変化の終焉について考察してみたい。

本稿で扱う資料は、東京都板橋区所在の井出南遺跡第2地点出土土器である。この第2地点出土の縄文土器には、若干の早期条痕文の土器片、前期後半の諸磯式・十三菩提式等が含まれるが、全体量からすると花積下層Ⅲ式および二ツ木式の古い段階(新田野段階)がほとんどを占めていることから、比較的継続時間の短い遺跡であることがわかる。この土器群の中に、明らかに花積下層Ⅲ式ないし二ツ木式とは異なる土器が存在し、遺構内で共伴する資料まである。本稿では、その花積下層Ⅲ式と二ツ木式とは異なる土器が、下吉井式土器の終焉の土器であることを明らかとする。

キーワード

対象時代 縄文時代前期
対象地域 南関東
研究対象 下吉井式土器

1. はじめに

縄文時代前期初頭土器については、これまで多くの先学によって論考され、研究が進められてきたことは周知のとおりである。1983年に開催された神奈川県考古学会による「シンポジウム：縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」を皮切りに、新資料を蓄積した1994年には「第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相」が開催され、新たな展開を迎える。近年では、前期初頭に関東北西部を主体地域とする花積下層Ⅰ式、長野県を主とする塚田式、関東南西部および山梨県域に展開する下吉井Ⅰ式、そして広範囲な分布をみせる木島Ⅲ式の各土器型式が併行関係にあると認知されるに至った。併せて、これら前期初頭期には、北陸における極楽寺式の古い段階も伴うことが指摘されている。しかしながら、下吉井式土器を早期末に位置付ける研究者も多いのも事実であった。そんな中であって、2013年に開催された山梨県考古学協会による「縄文前期前葉の甲信地域 ―山梨からみた中越式期―」で発表された一枚の写真は、大月市内での遺跡における住居で共伴した下吉井Ⅰ式と花積下層Ⅰ式土器(両者半完形品)を示したものであり⁽¹⁾、両土器型式が同時期であることが改めて認識されるに至った。

今日における前期初頭期の各型式土器の出土実態は、その分布範囲をも含め、変遷・変容の在り方が地域によって異なる状況も見出されつつあり、広域な土器実態の確認が急務となっている。

さて、本稿で扱う下吉井式土器については、澁谷昌彦の一連の論考(澁谷1982・1983a・1983b・1984b・1991・1994・2004・2008)に依るところであり、下吉井式はⅠ～Ⅲ式に分離され、そのⅢ式が花積下層Ⅲ式に併行すると位置付けられている。本稿では、その再検証を含めた下吉井式土器の終焉について考察すると共に、併せて花積下層Ⅲ式から二ツ木式への変遷について再確認する。その資料として、先ごろ刊行された東京都板橋区井出南遺跡第2地点から出土した土器を扱う。この資料は、遺構に伴い共伴土器の明らかな、極めて良例な資料である。

2. 下吉井式土器の変遷と編年、そして花積下層式

下吉井式土器は岡本勇による型式設定(岡本1970)以来、長らく縄文時代早期末葉の土器型式として位置づけられていた。その後、木島遺跡の報告に際して土器分析を行った澁谷昌彦は、木島式土器の型式細分研究に絡み神之木台式に後続する土器型式として下吉井式を位置づけ、木島Ⅲ式と下吉井Ⅰ式が併行関係にあり、共に前期初頭に位置づけられる土器群であることを示した(澁谷1982・1983a・1983b・1984a)。この見解に賛同する声の少ない中、釈迦堂遺跡を扱う小野正文は澁谷の下吉井式を神之木台式に後続する前期の土器とする見解を高

く評価している(小野1983)。また、澁谷の木島式土器の型式細分研究は神之木台式・下吉井式の細分と編年的位置づけにとどまらず、関東の花積下層式・二ツ木式・関山Ⅰ式まで含めた編年を示している。この澁谷の一連の論考(澁谷1982・1983a・1983b・1984a・1984b)を紐解くと、表1・2および図1・2に示されているように、表1(澁谷1982)では前期最初頭とする木島Ⅲ式に下吉井式と花積下層式、その次の木島Ⅳ・Ⅴ式に下吉井式と花積下層式(渦巻状の擦糸側面圧痕)、木島Ⅵ・Ⅶ式に下吉井式と花積下層式、木島Ⅷ式に「？」と花積下層式(新田野期)とし、さらに木島Ⅸ式に二ツ木式、木島Ⅹ式に関山Ⅰ式を充てている。翌年に示された表2(澁谷1983a)では表1の明瞭化を図り、木島Ⅲ式に下吉井Ⅰ式と花積下層式(有段口縁、隆帯)、木島Ⅳ・Ⅴ式に下吉井Ⅰ・Ⅱ式と花積下層式(渦巻状の擦糸側面圧痕)、木島Ⅵ・Ⅶ式に下吉井Ⅱ式と花積下層式、木島Ⅷ式に下吉井Ⅲ式と花積下層式(新田野期)、さらに木島Ⅸ式に二ツ木式、木島Ⅹ式に関山Ⅰ式が併行するとして下吉井式の3細分が示された。そして1991年になると、中越式土器を扱う中で編年表の修正がなされた。それが表3(澁谷1991)で、木島Ⅲ式に南関東域での下吉井式(花積下層式)、木島Ⅳ・Ⅴ式に南関東域の花積下層式、木島Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ式に南関東域の花積下層式と信州域での中越Ⅰ式、さらに東海(愛知)域での清水ノ上(+)と東海(静岡)域の木島Ⅸ式に信州域での中越Ⅱ式および南関東域での二ツ木式が、続いて東海(愛知)域での清水ノ上Ⅰ式と東海(静岡)域の木島Ⅹ式に信州域での中越Ⅲ式および南関東域での関山Ⅰ式が併行すると改変した。この改変は、広域に分布する木島式土器と遠隔地での土器群との共伴⁽²⁾、さらには中越式および中越式土器を介した土器群の位置づけに着目している。

この表3に示す編年をもって、1994年の第7回縄文セミナー「早期終末・前期初頭の諸様相」での澁谷発表(澁谷1994)がなされ、同時に発表された他地域との広域な編年対比がなされた。特に第7回縄文セミナーでは、筆者の花積下層式3細分および二ツ木式の内容が明示され、併せて長野県での塚田式⁽³⁾とする新型式の設定および塚田式・中道式の細分と変遷が示されたことにより、広域な編年対比が可能となった。その討議の中で、前期初頭に位置づけられる各土器型式として木島Ⅲ式、下吉井Ⅰ式、花積下層Ⅰ式、塚田式が併行することが確認され、同時に北陸地域での極楽寺式、福島県域での大畑G式の一部も前期にあることが示唆された。さらには、木島Ⅶ・Ⅷ式が花積下層Ⅲ式に併行することも改めて確認された。

その後も澁谷の中越式土器研究は続き、2006年の第19回縄文セミナー「前期前葉の再検討」での澁谷発表(澁谷2006)を経て、2008年には図3に示した編年模式図が提

表1 澁谷編年(澁谷1982) 東海・相模・関東における早期～前期の編年表(案)

	東 海 地 方	相 模 地 方	関 東 地 方
縄文時代早期(末)	木島Ⅰ式 木島Ⅱ式	神之木台Ⅰ式 神之木台Ⅱ式	
縄文時代前期(初)	木島Ⅲ式 木島Ⅳ式・木島Ⅴ式 木島Ⅵ式・木島Ⅶ式 木島Ⅷ式 木島Ⅸ式 木島Ⅹ式	下吉井式 下吉井式 下吉井式 ?	花積下層式 花積下層式(渦巻き状の燃糸側面圧痕) 花積下層式 花積下層式(新田野期) ニッ木式 関山Ⅰ式
前期			

澁谷昌彦 1982「木島式土器の研究 ―木島式土器の型式細分について―」より転載

表2 澁谷編年(澁谷1983) 東海・相模・関東における早期～前期の編年表(案)

	東 海 地 方	相 模 地 方	関 東 地 方
縄文時代早期(末)	天神山式 木島Ⅰ式 木島Ⅱ式	(打越式) 神之木台Ⅰ式 神之木台Ⅱ式	打越式
縄文時代前期(初)	木島Ⅲ式 木島Ⅳ式・木島Ⅴ式 木島Ⅵ式・木島Ⅶ式 木島Ⅷ式 木島Ⅸ式 木島Ⅹ式	下吉井Ⅰ式 下吉井Ⅰ式・下吉井Ⅱ式 下吉井Ⅱ式 下吉井Ⅲ式	花積下層式(有段口縁, 隆帯) 花積下層式(渦巻き状の燃糸側面圧痕) 花積下層式 花積下層式(新田野期) ニッ木式 関山Ⅰ式

澁谷昌彦 1983「神之木台式・下吉井式土器の研究 ―その型式内容と編年の位置について―」より転載

表3 澁谷編年(澁谷1991) 中越式土器編年(案)

	東 海		信 州	南 関 東
	愛 知	静 岡		
縄文時代前期(初)	木 島 Ⅲ		(+)	下 吉 井 式 (花積下層式)
	木 島 Ⅳ , Ⅴ		(+)	花 積 下 層 式
	木 島 Ⅵ , Ⅶ , Ⅷ		中 越 Ⅰ 式	花 積 下 層 式
	清水ノ上(+)	木 島 Ⅸ	中 越 Ⅱ 式	ニ ッ 木 式
	清水ノ上Ⅰ式	木 島 Ⅹ	中 越 Ⅲ 式	関 山 Ⅰ 式

(澁谷1982、1983年の編年表を基に今回作り替えた。)

澁谷昌彦 1991「中越式土器の研究 ―中越遺跡、阿久遺跡出土土器を中心として―」より転載

型 式		文 様 分 類							
縄 文 早 期 末	神之木台Ⅰ式								
		1. 駿河山王	2. 駿河山王	3. 駿河山王	4. 上の坊	5. 愛知天神山	6. 駿河山王	7. 上の坊	8. 上浜田
	神之木台Ⅱ式 (隆帯上刻目)								
		9. 中峰	10. 神之木台	11. 神之木台	12. 神之木台	13. 神之木台	14. 神之木台	15. 神之木台	16. 神之木台
	神之木台Ⅱ式 (隆帯上無文)								
		17. 木島	18. 神之木台	19. 菊名	20. 神之木台	21. 神之木台	22. 神之木台	23. 神之木台	24. 神之木台
縄 文 前 期	下吉井Ⅰ式								
		25. 木島	26. 木島	27. 菊名	28. 上山田	29. 菊名	30. 木島	31. 下吉井	32. 上山田
	下吉井Ⅰ式								
		33. 木島	34. 菊名	35. 菊名	36. 菊名	37. 木島	38. 木島	39. 木島	40. 上山田
	下吉井Ⅱ式								
		41. 菊名	42. 菊名	43. 菊名	44. 打越	45. 白幡西	46. 菊名	47. 菊名	48. 菊名
	下吉井Ⅱ式								
		49. 木島	50. 木島	51. 菊名	52. 菊名	53. 内畑	54. 下吉井	55. 天神山	56. ト伝
	下吉井Ⅱ式								
		57. 中	58. 木島	59. 下吉井	60. 神之木台	61. 神之木台	62. 下吉井	63. 神之木台	64. 菊名
	下吉井Ⅲ式								
		65. 下吉井	66. 下吉井	67. 下吉井	68. 下吉井	69. ト伝	70. 菊名	71. 下吉井	72. 木島
	下吉井Ⅲ式								
		73. 木島	74. 木島	75. 下吉井	76. 下吉井	77. 下吉井			

図1 神之木台式・下吉井式土器の細分と文様変遷図

澁谷昌彦 1983「神之木台式・下吉井式土器の研究 ―その型式内容と編年の位置について―」より転載

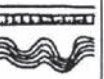
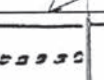
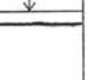
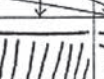
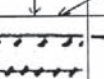
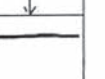
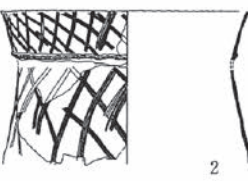
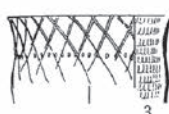
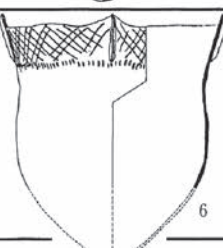
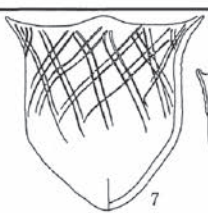
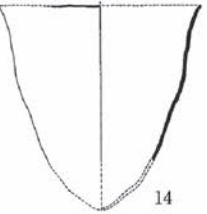
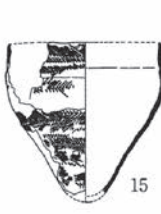
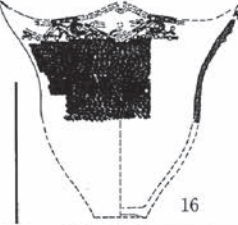
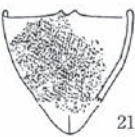
	型 式	文 様 分 類									
縄 文 早 期 末	木 島 I 式										
		1. 木島			2. 中峰	3. カゴタ					
縄 文 中 期	木 島 II 式										
		4. カゴタ	5. カゴタ	6. 木島	7. 木島	8.	9. カゴタ	10. 神の木台	11. 塩屋		
縄 文 後 期	木 島 III 式										
		12. 木島	13. 木島	14. 木島	15. 塩屋	16. カゴタ	17. 下吉井	18. カゴタ	19. カゴタ		
縄 文 最 後 期	木 島 IV 式										
			20. 木島	21. 木島	22. 北高根		23. 木島	24. 木島			
縄 文 最 後 期	木 島 V 式										
		25. 木島	26. 木島	27. 菊名	28. 木島		29. 上之山	30. 木島			
縄 文 最 後 期	木 島 VI 式										
				31. 打越	32. 菊名			33. 木島	34. 木島		
縄 文 最 後 期	木 島 VII 式										
		35. 木島		36. 木島			37. 木島	38. 木島	39. 木島		
縄 文 最 後 期	木 島 VIII 式										
		40. 木島	41. 清水之上	42. 菊名		43. 菊名	44. 菊名	45. 木島	46. 木島		
縄 文 最 後 期	木 島 IX 式										
		47. 中越	48. 田村原	49. 田村原	50. 菊名	51. 菊名	52. 菊名	53. 菊名	54. 田村原		
縄 文 最 後 期	木 島 X 式										
					55. 梅の木平	56. 梅の木平	57. 梅の木平	58. 上川	59. 梅の木平		

図2 木島式土器の細分と文様変遷図

澁谷昌彦 1983「神の木台式・下吉井式土器の研究 ―その型式内容と編年の位置について―」より転載

			中越様式	共伴土器
前期	4期	中越Ⅰ式	 1  2  3  4	 5
	5期	中越Ⅱ式	 6  7  8  9  10	 11
	6期	中越Ⅲ式	 12  13  14  15	 16
	7期	中越Ⅳ式	 17  18  19  20  21  22  23	

1～4・6・8～10・12～15：中越(長野：1/12) 5：三原田城(群馬：1/12) 7・11：明神原(長野：1/9) 13・16：阿久(長野：1/12)
17～20：上北田(山梨：1/16・1/36) 21～23：駒形(長野：1/8・1/12)

図3 中越様式・共伴土器編年模式図

澁谷昌彦 2008「塩屋式・木島式・中越式土器」より転載

示された(澁谷2008)。この図3には、木島Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ式に中越Ⅰ式と花積下層Ⅲ式が併行し、木島Ⅸ式に中越Ⅱ式および二ツ木式、木島Ⅹ式には中越Ⅲ式および関山Ⅰ式、さらに後続する中越Ⅳ式を新たに設定して神ノ木式・関山Ⅱ式を充てた。ここで注目されるのは木島Ⅸ式・中越Ⅱ式・二ツ木式の関係であるが、その根拠に長野県明神原遺跡における共伴例を挙げている⁽⁴⁾。

以上、澁谷昌彦の木島式土器の型式細分を軸とし、さらには中越式を軸とした編年の位置づけを読み解くと、併行関係にある木島Ⅲ式、下吉井Ⅰ式、花積下層Ⅰ式、塚田式をもって前期とし、木島Ⅳ・Ⅴ式に下吉井Ⅰ・Ⅱ式と花積下層Ⅱ式、木島Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ式に下吉井Ⅱ・Ⅲ式および中越Ⅰ式と花積下層Ⅲ式、さらに木島Ⅸ式に中越Ⅱ式と二ツ木式、続いて東海(愛知)域での清水ノ上Ⅰ式と木島Ⅹ式に中越Ⅲ式および関山Ⅰ式、中越Ⅳ式に神ノ木式および関山Ⅱ式が併行することが説かれている。つ

まり、下吉井式土器は前期初頭の木島Ⅲ式からⅧ式までの間、花積下層Ⅰ式からⅢ式までの間に存続し、その特徴から下吉井Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式に3細分されている。また、その分布域は神奈川県、東京都、埼玉県南部、山梨県に跨る土器群であることが知られている。

一方、花積下層式は、花積下層Ⅰ式段階では群馬県域を中心とした小地域の分布であったが、花積下層Ⅱ式以降に南関東にも分布域を広げ、花積下層Ⅲ式および二ツ木式に至ってはさらなる分布域の拡散がみられる。花積下層Ⅲ式および二ツ木式の拡散の実態は、新潟県内での花積下層Ⅲ式の散発的な出土や、新潟県大武遺跡での布目式と共に出土した二ツ木式土器、福島県愛宕原遺跡や山田B遺跡、山形県松原遺跡などに見る二ツ木式土器の出土が物語っている。

3. 井出南遺跡第2地点出土土器

東京都板橋区泉町に所在する井出南遺跡第2地点は、集合住宅建設に伴い発掘調査が2022(令和4)年に行われ、2023年9月に調査報告書が刊行された。検出された主体となる遺構は縄文時代前期初頭の花積下層式期とされ、竪穴建物には1・4・8・11・17・27号竪穴建物の計6軒、性格不明な竪穴遺構として2・3・4・5・7・8・9・10・11・12・14・15・16・17号性格不明遺構の計14基、土坑として1～11・17号土坑の計12基、そしてピット10基が検出されており、他に旧石器時代の遺物と時期不明な土坑・ピットがある。また、出土した縄文時代の土器は、花積下層式3,774点、木島式5点、諸磯式21点、十三菩提式6点、前期土器1点、五領ヶ台式2点、阿玉台式1点、中期土器17点、称名寺式4点、加曾利B式2点、後期土器17点、時期不明土器321点と報告されている。この出土土器を整理作業時に見学させていただいた結果、花積下層式土器の視点からすれば、花積下層Ⅲ式から二ツ木式への移行期段階の土器群であり、その主体は二ツ木式の古い段階にあることが理解できた。また、それらとは異なる一群の土器の存在と、僅かではあるが木島式土器が伴出していることも確認できた。正に、これまでにない良例な土器群である。そこで、本稿では土器の出土量が多く、良好な出土状態にある遺構を選択して扱うこととした。以下、遺構ごとに出土土器を確認する。

1号竪穴建物(SI 1)出土土器 (図4 1～11)

報告書では、40点の土器が図示されている。1・2は平口縁の外反する口縁部が肥厚して有段となり、1の肥厚口縁帯には鋸歯文を入り組ませた複合鋸歯文を描く。2は肥厚口縁帯および有段下の口縁部文様に2条単位の鋸歯文を重畳する。3は炉の脇に付随した埋設土器で、平口縁の外反する口縁部が幅狭に肥厚して段をなし、肥厚口縁および胴部上半は無文で、胴部下半に短い条痕状の貝殻背圧痕を施す。4は内反ぎみの平口縁の口縁以下に、縦位に貝殻背圧痕文を施す。5は外反する波状口縁の口縁部以下に貝殻背圧痕文を施す。6は外反する平口縁の口縁部を幅広な無文帯とし、以下に貝殻背圧痕文を施す。7～9は胴部ないし口縁部下に隆帯を巡らせるもので、7は胴部に2条の細隆帯を巡らせ、隆帯脇に竹管具による円形刺突を配する。8は口縁部にLRの縄文を施し、その下端に刺突(横位ハ字状か)をもつ細隆帯を巡らせる。9は口縁部下に2条の細隆帯を巡らせ、隆帯脇に刺切状の粗い刺突を配し、以下の胴部にLRの縄文を施す。10は胴部にLRとRLによる結束羽状縄文が施される。以上の土器には全て胎土に繊維を含むが、器厚の極めて薄い11は無繊維土器である。この11はやや内反ぎみとなる小波状口縁で、口唇部に刻みをもち、波頂部には刻みをもつ細い隆帯が垂下させ、口縁部には細い条線が浅く斜位に施されている。

これらの土器の観察から、口縁部が肥厚し、有段で肥厚帯を有している点では、1～3は花積下層Ⅲ式的な要素があるものの、3の肥厚帯は幅狭となるなど違いをみ

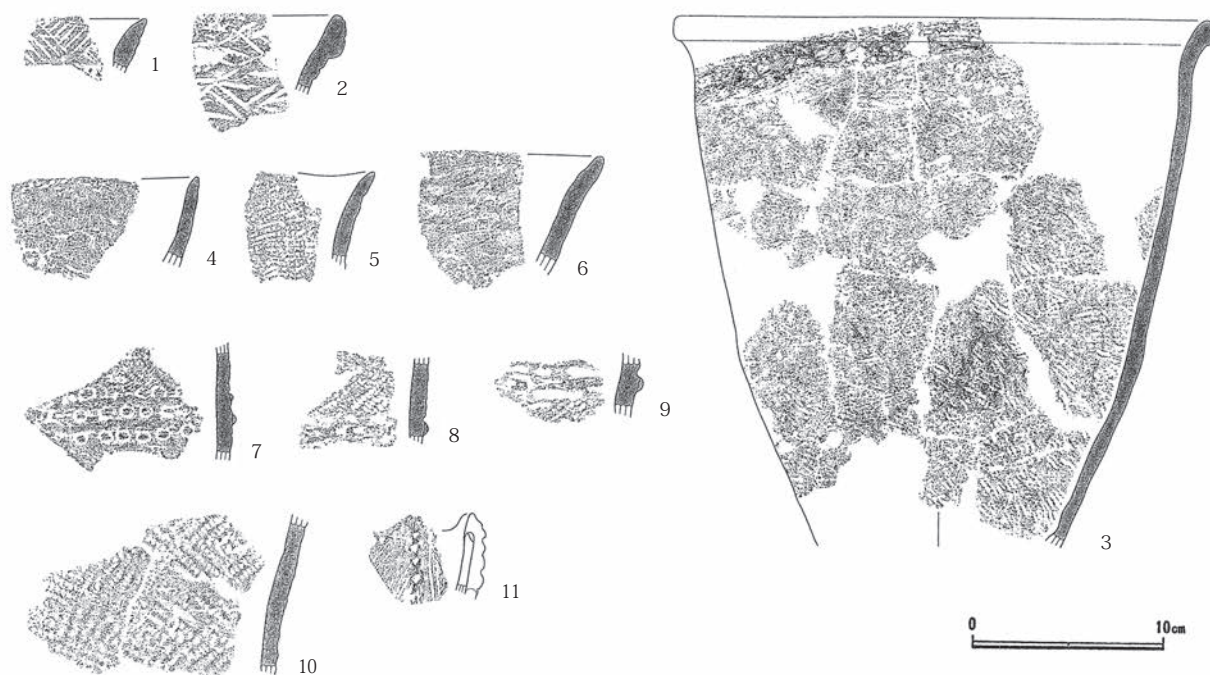


図4 井出南遺跡第2地点 1号竪穴建物出土土器

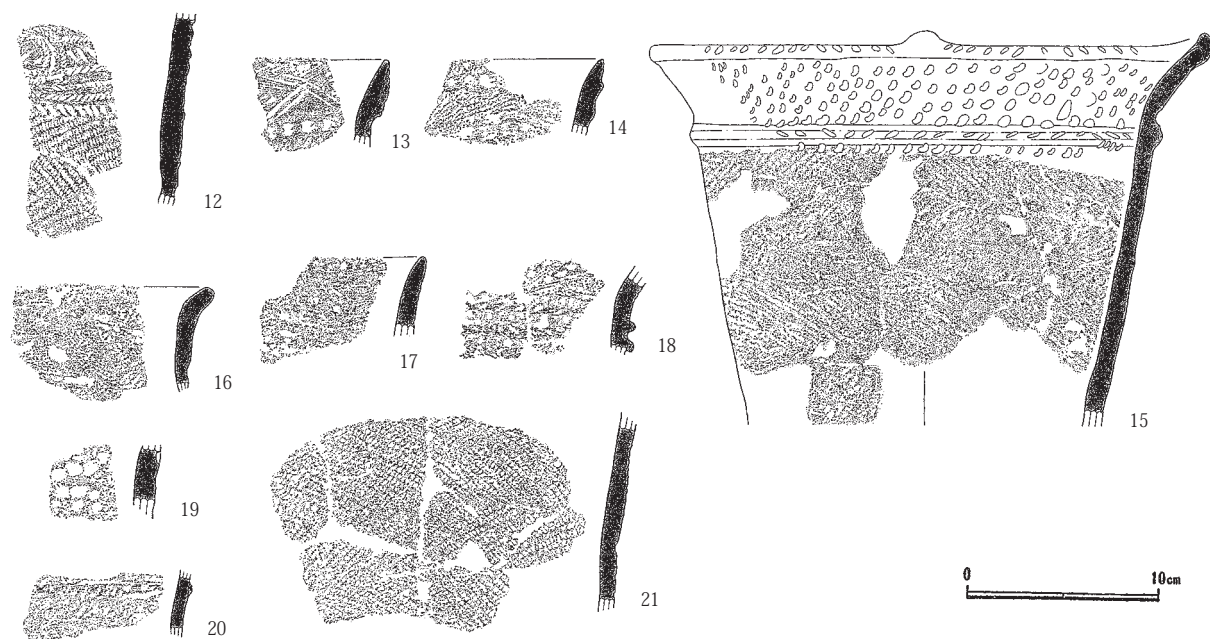


図5 井出南遺跡第2地点 4号竪穴建物出土土器

せる。また、4～6の口縁部形状からすると、花積下層Ⅲ式よりも新しい二ツ木式の特徴に近い。さらに、7～9の口縁部下端ないし胴部(本来は口縁部ないし頸部文様帯を区画する位置)に刻みや刺突を伴う細い隆帯を巡らせている点、10に施文されている縄文が結束羽状縄文であることは、二ツ木式にみられる特徴である。それと11であるが、その器厚や施された文様から澁谷編年の木島Ⅸ式であることがわかる。

これら出土土器を考えると、1号竪穴建物は花積下層式期というよりは花積下層Ⅲ式よりも新しく、二ツ木式の最も古い段階に位置づけられ、この段階に木島Ⅸ式が伴うことが確認されたこととなる。

4号竪穴建物(SI 4)出土土器 (図5 12～21)

報告書では、19点の土器が図示されている。12は頸部文様に撚糸側面圧痕による渦巻文やそれを連結する菱状の文様が描かれ、そこに刺切文が規則的に配される。そして、その文様帯下端を刻み列を巡らせて区画し、以下の胴部に非結束の羽状縄文を施す。13は平口縁の外反する口縁部が肥厚して有段となり、その肥厚口縁帯に2本単位(半截竹菅具か)の菱形文を描き、有段下に半截竹菅具による刺突が1条巡り、以下に縄文を施す。14は外反する平口縁以下に貝殻背圧痕を施すが、報文によると口縁下に低い隆帯を2条巡らせるという。15は外反する平口縁に4単位の小突起を有し、口唇部に斜位の刻みをもつ。口縁から頸部にかけては半截竹菅具による刺切状の背面刺突(報文には多截竹菅状工具とある)を横位方向に充填し、その下端を斜位の刻みをもつ1条の幅広な隆帯

および隆帯下に刻みを巡らせて文様帯区画を行い、以下の胴部にLとRによる非結束の羽状縄文を施す。16は外反する平口縁の屈曲ぎみの口唇部および口縁以下に貝殻背圧痕文を施し、17は外反する平口縁の口縁以下が無文となる。18は頸部下端に刻みをもつ2条の隆帯を巡らせるが、報文には隆帯に円形刺突を沿わせ、口縁部に円形刺突およびL・Rの撚糸側面圧痕を施文とある。また、19についても、報文には半截竹菅状工具による3～4段の密な刺突と、直下にLL・Rの撚糸側面圧痕文を横位に施文かとある。20は頸部に刻みをもつ隆帯を巡らせ、以下に縄文を施す。21は胴部に非結束の羽状縄文を施している。

これらの土器の観察から、12は文様の施文法も含め典型的な花積下層Ⅲ式であり、13も口縁部の特徴から花積下層Ⅲ式と言える。14は不明瞭であるが、花積下層Ⅲ式よりも新しく思われる。15に至っては、刻みをもつ口唇形状、刺切状刺突の充填および刻み隆帯による文様帯区画といった二ツ木式の要素をふんだんに盛り込んでいる。同様に16・18～21についても、二ツ木式に含めて考えられる。なお、17の無文となる口縁部片については、注視しておきたい。

これら出土土器を考えると、4号竪穴建物も1号竪穴建物と同様に、二ツ木式の古い段階に位置づけられるものと考えられる。

8号竪穴建物(SI 8)出土土器 (図6 22～52)

報告書では、113点の土器が図示されている。22は頸部文様に2本組の側面撚糸圧痕と刺切文で主文様を描

き、胴部には0段多条のRLの縄文を施す。23は頸部文様に3本組の側面撚糸圧痕と刺切文(矢羽根状に充填)で主文様を描き、その下端を刻み隆帯を巡らせて文様帯区画する。24・25は外反する波状口縁を呈し、24は波頂部口唇に円形刺突をもち、波頂下口縁部に撚糸側面圧痕と刻み隆帯で2段の弧状区画を配し、その下段中央に円形刺突をもつ円形隆帯を配する。また、口・頸部文様帯内には刺切文が充填される。25は波頂部に円形の隆帯および口唇部に刻みが施され、報文によると口縁部文様に3本組の撚糸側面圧痕(L・R・L)で円形刺突を配した蔵手文を描き、文様の隙間に横位沈線を充填するとある。26・27は外反する平口縁の口縁部が肥厚して有段となり、26の肥厚口縁帯には縦位2列の短い刻み隆帯を貼付し、さらに粗い複合鋸歯文を描く。また、有段下の頸部には刺切文を横位に充填する。27の肥厚口縁帯には瘤状の隆帯が貼付され、その有段下にも瘤を貼付する。また、肥厚口縁帯には貝殻背圧痕文を施し、頸部文様には2条の単沈線で菱形文を横位に連続させ、文様間に円形刺突を充填させる。その下端を2条の刻み隆帯を巡らせて文様帯区画し、以下の胴部には貝殻背圧痕文を施す。28は胴部から口縁部にかけて直線的に開く小型の深鉢で、口唇部が外反ぎみに尖る平口縁を呈し、口縁直下に斜位刻みをもつ低い太めの隆帯を1条巡らせると共に、口縁および隆帯上に4単位の小突起を配する。その刻み低隆帯下には半截竹筥具による刺切状の背面刺突を横位方向に充填し、その下端には斜位刻みをもつ低い太めの隆帯を1条巡らせて文様帯区画する。そして、以下の胴部に貝殻背圧痕が施されるものの、文様帯区画した低隆帯下には刺切状の背面刺突が幅狭く施される。29はやや外反ぎみの平口縁の口唇部に刻みをもち、口縁以下に刺切文を横位に充填する。30は口・頸部に刻みをもつ隆帯による曲線的な文様と円形隆帯が配され、その隙間に刺切文を充填させる。31は口・頸部に刺切文を充填させる。32～34は口・頸部文様の下端に刻み隆帯を巡らせるもので、32・33は2条の隆帯を、34はやや太い1条の隆帯を巡らせて文様帯区画し、33・34の胴部には貝殻背圧痕文が施される。35は直線的に開く深鉢で、口縁直下に2条の高い隆帯を巡らせ、その隆帯間に横位ハ字状の刺突を加え、隆帯を跨ぐように円形隆帯を貼付する。そして、隆帯上を含む口縁以下にはRLの縄文が施される。36は外反ぎみな平口縁の口縁下に低く細い隆帯を1条巡らせて口縁部帯を区画し、口縁以下にLRの縄文を施す。37は外反ぎみな波状口縁の口縁以下にLR(0段多条か)の縄文を施す。38・39は外反する平口縁の口唇部に刻みをもつもので、38は横位ハ字状の刻み(刺突)を有し、口縁部以下にRLとLRによる非結束の羽状縄文を施す。39は斜位の刻みを有し、口縁部以下にRLとLRによる非結束の羽状縄文を施す。40～45は口縁以下に貝殻背圧痕を施すもので、

40・41は屈曲するように外反する平口縁であり、42・43は緩く外反する平口縁、44・45はやや直線的な平口縁を呈する。46は竪穴建物内の炉脇に埋設された土器で、口縁部と底部を欠く。口縁部は外反するように開き、頸部は括れ、胴部は膨らんでから底部に向かって窄まる大型の深鉢。頸部下端となる括れ部に1条の太い隆帯を巡らせて区画するが、器面全体に貝殻背圧痕が施される。47は頸部が括れ、胴部が屈曲状に強く張る器形を呈し、括れ部に2条の高い隆帯を巡らせて文様帯区画し、その隆帯間には横位ハ字状の刺突を加え、隆帯を跨ぐように円形隆帯を貼付する。そして、隆帯で区画した上位の頸部および下位の胴部にRLの縄文を施す。48は直線的な頸部に斜位の刻みをもつ細い隆帯が1条巡らされ、その上下に貝殻背圧痕を施す。49は外反する平口縁で、口縁下は無文。50も同様に外反する平口縁の口縁下が無文となるが、口唇部に斜位の刻みを有する。51・52は口縁下ないし頸部下端に2条の隆帯を巡らせて文様帯区画するので、隆帯の上下が無文となる。51の隆帯には瘤状貼付を有する。

これらの土器の観察から、22は文様の施文法も含め典型的な花積下層Ⅲ式であり、23はやや新しい傾向にある。24は口縁形状および口・頸部に描かれる文様、特に細い刻み隆帯を弧状に配する点は、新田野段階と称された土器にもみられた文様であり二ツ木式の古い段階の特徴である。30も同様と言える。また、26・27での口縁部の有段となる肥厚帯は、花積下層Ⅲ式的な要素があるものの幅狭傾向にあり、施文される複合鋸歯文も粗く、27の連続する菱形文も単沈線で描くなどの違いをみることから、花積下層Ⅲ式よりも新しく思われる。さらに、28や32・33・36・48での口縁下および頸部下端に巡らせた刻み隆帯は、二ツ木式の最も特徴的な文様帯区画であり、口・頸部に施文される刺切文ないし刺切状刺突の充填は二ツ木式に独特な文様であることから、27は勿論、29等も二ツ木式と言える。他にも二ツ木式の特徴を示す土器に、口唇部に斜位の刻みないし横位ハ字状の刻み(刺突)をもつ38・39があり、50にも刻みがみられる。同様に隆帯を巡らせ土器に35・47があるが、この2点は隆帯間のハ字状刺突および図化された縄文の状況等から同一個体の可能性がある(報告には、同一と考えられる資料が他にも掲載されている)。

一方、頸部の下端に隆帯を巡らせる中でも、46にみる太い隆帯は特異である。隆帯の太さに視点を充てれば、花積下層Ⅲ式からの継続性は考えられず、むしろ下吉井式に求められよう。さらには、49・50といった無文となる口縁部片、無文地に隆帯を巡らせた51・52についても、再度注視する必要がある。

これら出土土器を考えると、先の1・4号竪穴建物と同様に、8号竪穴建物も二ツ木式の古い段階に位置づけ

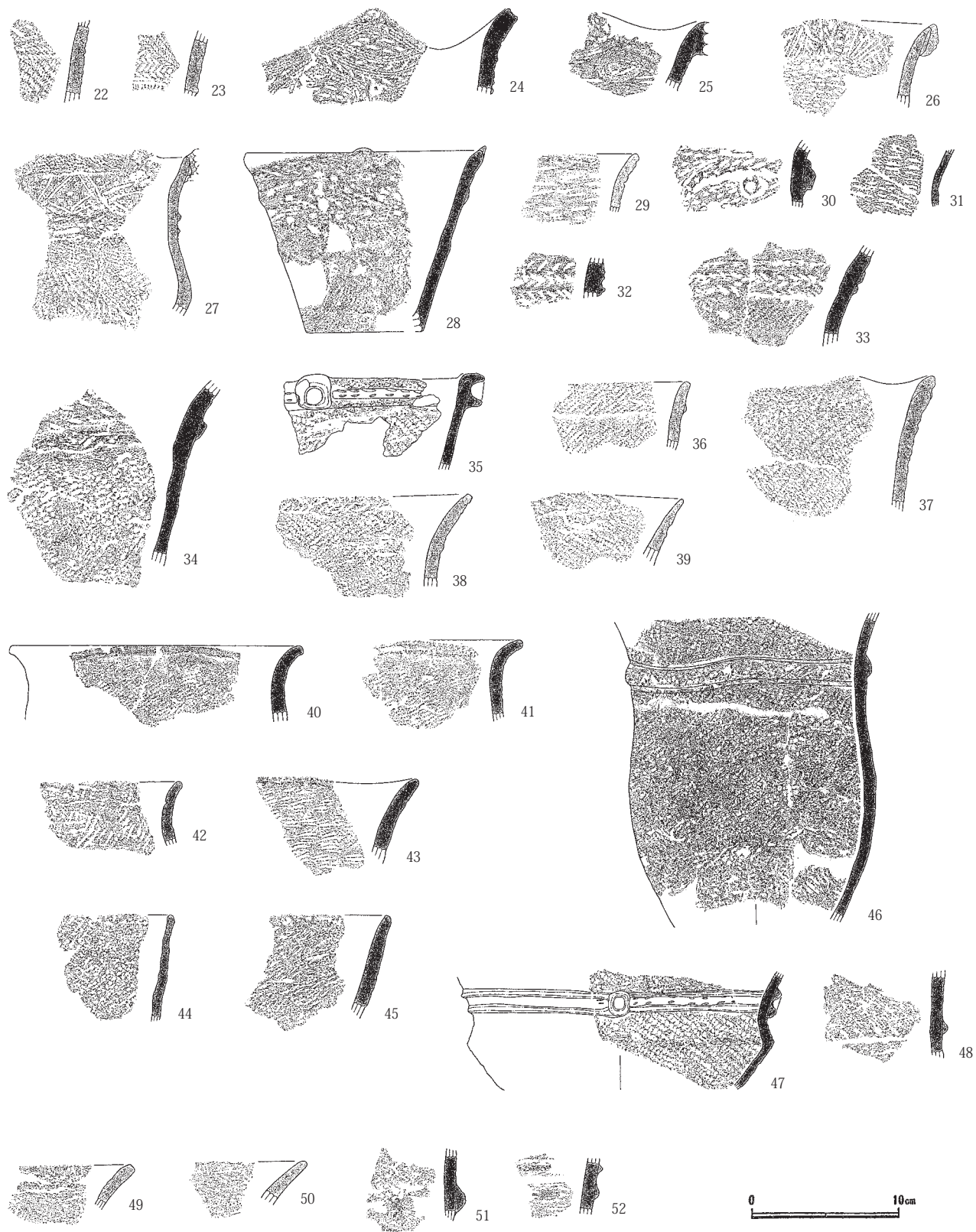


图6 井出南遺跡第2地点 8号竖穴建物出土土器

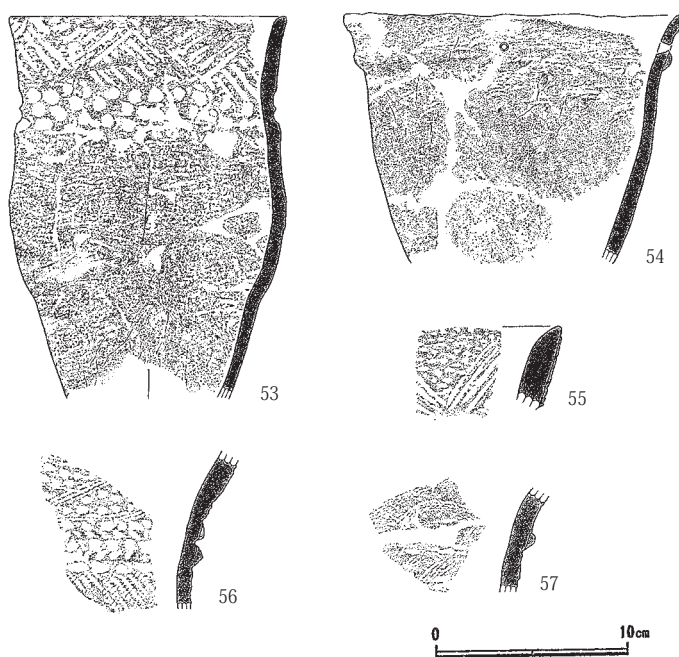


図7 井出南遺跡第2地点 6号土坑出土土器

られるものと考えられる。併せて、縄文のみを施す一群および貝殻背圧痕のみを施す一群の土器が加わることも必然的である。

6号土坑(SK 6)出土土器 (図7 53~57)

土坑は、不正楕円形を呈し、長軸1.32m、短軸0.92m、深さ0.71mを測る。報告書では、16点の土器が図示されている。53は僅かに外反する平口縁を呈し、口縁下にやや幅広い口縁部文様帯を設け、太い沈線による複合鋸歯文を粗く描く。その下部となる括れた頸部には、刺切状となる円形刺突を横位方向に充填し、胴部以下には貝殻背圧痕が横位に施される。54は外反する平口縁を呈した小型の深鉢で、口縁下にやや幅広い隆帯を1条巡らせて文様帯を区画し、隆帯の上下に貝殻腹縁文が僅かに残る。また、口縁下に孔(両面穿孔)を有し、胴部は無文(部分的に貝殻腹縁ないし貝殻背圧痕の痕跡が残る)となる。55は外反する平口縁の口縁部肥厚帯に数条の沈線で鋸歯状の文様を描き、その隙間に細かな刺突を充填する。56は口・頸部に3本組の撚糸側面圧痕で蕨手状等の文様を描き、その隙間に刺切状の粗い刺突を充填する。さらに、頸部下端の括れ部に斜位刻みをもつ隆帯を2条巡らせ、隆帯脇には刺切状の粗い刺突を加え、以下の胴部にRL(0段多条)の縄文を施す。57は口縁下にやや幅広い隆帯を1条巡らせて文様帯区画し、口縁部および頸部文様に4本組の撚糸側面圧痕による曲線等の文様を描く。

これらの土器の観察から、57の口縁部肥厚帯をもたない複合鋸歯文や頸部文様である刺切状となる円形刺突か

らは、その施文文様の粗雑さから花積下層Ⅲ式より新しい段階の土器と見ることができよう。また、相伴する57は僅かに貝殻文の痕跡を残すが無文で、頸部に太目な隆帯を1条巡らせただけの土器であり、先の46と同様に幅広隆帯という点では下吉井式からの継続文様と考えられる。55は口縁部肥厚帯に鋸歯等の文様をもつが、文様間への刺突の充填からすれば二ツ木式の特徴と言える。55・56も主文様に撚糸側面圧痕を用いるが、他の文様要素からすると花積下層Ⅲ式よりも新しい段階の土器である。

これら出土土器を考えると、やはり前述と同様に、二ツ木式の古い段階に位置づけられるものと考えられる。

以上、1・4・8号竪穴建物と6号土坑からの出土土器について、掲載土器を抜粋して記述してきた。記述を省いた他の竪穴建物についても、出土土器の内容はほぼ変わらず、出土量が少ない状況にあるものの、二ツ木式の古い段階に位置づけられる。また、検出数の多い性格不明遺構からも少量ずつの同様な土器が出土し、その状況は土坑においても同じである。

4. 下吉井式終焉土器の変容の在り方

井出南遺跡第2地点における出土土器を確認してきたが、各遺構出土土器は花積下層Ⅲ式を僅かに含むものの、土器の主体は花積下層Ⅲ式より新しい段階の土器で、所謂「二ツ木式古段階」⁽⁵⁾(新田野段階を含む)に相当する土器群である。つまり、井出南遺跡第2地点は、二ツ木式(古段階)期の遺跡ということになる。出土した「二ツ木式古段階」の土器には、撚糸側面圧痕による蕨手文等の主文様描出という、前段階の花積下層Ⅲ式の主文様を強く継承した描出法が目立つ。同様に継承される文様には、粗さに変化がみられる複合鋸歯文、規則的な配置から文様間・文様帯内への充填へと変化した刺切文や刺切状刺突があり、さらには口縁部の肥厚帯が僅かに残りつつも激減するという変化がある。そして、新たな要素は器形にも表れる。まず、口縁が外反して開く形状が多くなり、口縁形状においても4単位の波状口縁が急増する。施文される文様をみても、刻み状ないし横位八字状刺突という口唇部への加飾、刻みをもつ細隆帯による口・頸部文様帯区画、さらには施文する羽状縄文に結束羽状縄文が加わるなど、二ツ木式の要素が急展開する。これが、「二ツ木式古段階」の特徴であり、以前に新田野段階とされた土器群をも含む内容である。

因みに、花積下層Ⅲ式からの撚糸側面圧痕による主文様描出の変遷をみると、側面圧痕の撚糸はLとRの2本組であるのが本来の基本であり、本数を重ねるのは新しい傾向といえる。また、この「二ツ木式古段階」の特徴で

ある2本組撚糸側面圧痕は、刻みをもつ2条の細隆帯(刻みは撚糸圧痕にみられる縄の節を表し、2条の隆帯は2本組の撚糸であることを表す)に置換されて主文様描出し(「二ツ木式新段階」)(5・6)、さらに刻みをもつ2条の細隆帯は沈線間に刻みをもつ3条の単沈線へと変化し(関山Ⅰ式古段階)(6)、その後は3条の単沈線から半截竹筥具による沈線へと変化していく(関山Ⅰ式中段階)⁽⁶⁾。この時期の土器群の変遷の詳細については、2006年の『第19回縄文セミナー 縄文前期前葉の再検討 資料集・記録集』を参照いただければ幸いである。

一方、このような土器群の中であって、井出南遺跡第2地点出土土器には、8号竪穴建物46や6号土坑54に代表されるように、口縁下ないし頸部下に文様帯区画する幅広隆帯が巡る一群が散見できる。その幅広隆帯は、先述したごとく下吉井式からの隆帯の継承と考えられることから、下吉井式が「二ツ木式古段階」にまで継続していることが明らかであり、この一群こそが下吉井式の終焉土器ということになる。そうした視点でみると、4号竪穴建物15は二ツ木式の要素を強くもつものの、幅広隆帯であることから下吉井式の要素をも取り込む折衷土器であり、正に同時期と言えよう。同様に、二ツ木式と下吉井式の要素が折衷したものに8号竪穴建物28・34を挙げることができる。

正に、土器型式の文様変遷における他型式との交流(融合・折衷)あるいは変容の姿である。また、花積下層式や二ツ木式に無文となるものが極めて少ないことからすれば、8号竪穴建物49・50といった無文土器は、二ツ木式から外れる土器群である可能性が高い。

さらに重要なのは、この「二ツ木式古段階」の土器群に、1号竪穴建物11にみる木島Ⅸ式が伴うことを、改めて認識する必要がある。

5. おわりに

関東地方の縄文時代前期初頭土器として花積下層式が位置づけられてから久しいが、その実態は花積下層式の最も古い段階の土器群は群馬県を中心とした関東北西部域に分布の中心を置き、その段階の南関東では下吉井式が主流にあった。その後に分布域を拡大させた花積下層式は、花積下層Ⅲ式・二ツ木式に至って南関東を含む関東全域にまで及ぶこととなる。そうした時間経過に伴う土器の型式(文様)変遷ならびに土器分布域の変異の中であって、井出南遺跡第2地点での出土土器は、花積下層Ⅲ式から二ツ木式へとの変遷を示す格好の土器群である。そして、その土器群の中に伴出した出自の異なる幅広の隆帯をもつ土器の一群は、客体化した下吉井式由来の土器であり、しかも二ツ木式の口・頸部文様と幅広隆帯を併せもつといった折衷土器の存在など、時間的な位置づけを考える上においてもその同時性を疑う余地がな

いことを示している。

そして、もう1点重要なのは、この「二ツ木式古段階」に木島Ⅸ式土器が相伴していることである。このことは、一連の澁谷の論考にある「二ツ木式と木島Ⅸ式が併行関係にある」ことを再確認したということになる。その上で、下吉井式は「二ツ木式古段階」にその終焉を迎え、変容したまま収束していくことが明らかとなった。

今後も、同様な資料が増加することを期待したい。併せて、群馬県下のこの時期に急展開する「コの字形石敷炉」(谷藤ほか2014)が、近隣域に分布を拡散するのもかも注意していきたい。

文末ではありますが、本稿を草するにあたって井出南遺跡の情報をご教示いただいた毒島正明氏、そして整理作業終盤にもかかわらず資料見学の機会を設定いただいた宅間清公氏をはじめとする東京航業研究所の皆様方に、記して感謝申し上げます。

註

- (1) 「関東北西部における前期前葉の様相」と題した筆者の発表で使用した写真である。この資料は以前にも実見していたが、山梨県大月市原平遺跡出土の土器で、シンボジウムの事前打ち合わせの際に改めて観察を行った。縄文時代前期初頭・前期中葉期の竪穴建物等の遺構が多く検出されている。
- (2) 群馬県三原田城遺跡(谷藤ほか1987)の調査時に、花積下層式土器に木島式土器が共存する複数の遺構が確認されていた。その後に、筆者の花積下層式3細分案を考える中の3段階目となる土器群に澁谷編年の木島Ⅶ・Ⅷ式が伴うことが明らかとなり、澁谷氏との意見交換をつぶさに行った。また、群馬県内での花積下層式の極めて古い1段階の土器群は、南関東での出土が極めて稀であり、逆に群馬県内には下吉井式土器の出土実態が極めて稀であることから、関東北西部と南関東とは土器群の出土実態が異なることも了解していた。
- (3) 第7回縄文セミナー開催に伴い、長野県資料として整理途中の塚田遺跡・下御堂遺跡の資料を見学させていただいた際、説明いただいた下平博行・賛田 明 の両氏に型式設定の必要性を説き、その設定を勧めた土器群である。その後の同型式の分布をみると、長野県全体に分布をみる土器であると同時に、周辺県にまで分布することが知られるようになった。しかし、後続の中道式の分布は地域的な偏りがあるようで、花積下層Ⅲ式の段階には中越Ⅰ式が木島式を母体として新たに南信で成立し、時期の経過と共に広がりを見せ、関東の関山式期の遺跡にまで拡散する。つまり、長野県の場合、地域によって土器様相の状況が異なるようで、一つの土器型式で長野県全体を収めるのは無理な状況もある。
- (4) 長野県長門町所在の明神原遺跡第14号住居跡から図3に示した7と11が共存しており、7は中越Ⅱ式、11は二ツ木式土器である。整理作業時に澁谷氏と筆者の二人で実見させていただいた。
- (5) 二ツ木式土器については、以前の拙稿「二ツ木式土器」(谷藤1988)で2細分する案を提示したことがある。その後は、細分を積極的に進めてこなかった。しかし、井出南遺跡第2地点出土土器をみると、再度、細分の必要性を強く感じることから、敢えて「二ツ木式古段階」と称した。また、「二ツ木式新段階」とは、拙稿「二ツ木式土器」(谷藤1988)での二ツ木Ⅱ式が相当する。
- (6) この関山Ⅰ式古・中・新段階とは、2006年の第19回縄文セミナー前期前葉の再検討で発表した「二ツ木式から関山式への土器文様の変遷と異系統土器」(谷藤2006)での関山Ⅰ式の3段階変遷で示した細分であり、第Ⅰ段階を古段階、第Ⅱ段階を中段階、第Ⅲ段階を新段階とした。また、黒坂禎二の南関東における変遷(黒坂2006)との比較では、第Ⅰ段階(古段階)が貝崎第2段階、第Ⅱ段階(中段階)が貝崎第3段階、第Ⅲ段階(新段階)が貝崎第4段階にそれぞれ併行する。

主要引用・参考文献

- 大竹幸恵・田中浩江ほか 2001『明神原・桑木原遺跡』長門町教育委員会
岡本 勇 1970『下吉井遺跡』埋蔵文化財調査報告Ⅰ 神奈川県教育委員会
小野正文 1983「縄文時代早期・前期初頭の土器について 一釈迦堂遺跡群を中心として」『研究紀要 1』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 41-50・Pl.1-7
小野正文 1986『釈迦堂Ⅰ』山梨県教育委員会
神奈川考古同人会 1983「シンボジウム：縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」
金子直行 2008「条痕文系土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
君島勝秀 2005「縄文時代早期末・前期初頭の土器群についての考察 一下吉井式併行期を中心にして」『埼玉県立歴史資料館 研究紀要 27』埼玉県立嵐山史跡の博物館
黒坂禎二 2006「二ツ木・関山式土器の変容と細分史 一南関東を中心として」『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』資料集・記録集 縄文セミナーの会
澁谷昌彦・佐野五十三ほか 1981『木島』富士川町教育委員会
澁谷昌彦 1982「木島式土器の研究 一木島式土器の型式細分について

- 一」『静岡考古学研究 11』静岡県考古学会 1-17
澁谷昌彦 1983 a「神之木台式・下吉井式土器の研究 一その型式内容と編年の位置について」『小田原考古学会会報 11』小田原考古学会 1-45
澁谷昌彦 1983 b「神之木台式・下吉井式土器の型式内容の再調査」『シンボジウム：縄文時代早期末・前期初頭の諸問題』発表要旨 神奈川考古同人会
澁谷昌彦 1984 a「澁谷発表」『神奈川考古 18』神奈川考古同人会 p. 79
澁谷昌彦 1984 b「花積下層式土器の研究 一側面圧痕文土器を中心として」『丘陵 11』甲斐丘陵考古学会 1-25
澁谷昌彦 1991「中越式土器の研究 一中越遺跡、阿久遺跡出土土器を中心として」『縄文時代 2号』縄文時代文化研究会 1-25
澁谷昌彦 1994「土器型式より見た縄文早期と前期との境について 一関東・中部・東海地方からの検討」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』資料集・記録集 縄文セミナーの会
澁谷昌彦 2004「下吉井式土器・木島式土器・花積下層式土器」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告書 12集』 147-178
澁谷昌彦 2006「各型式の整理と東日本で出土する近畿・東海・中部の土器型式」『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』資料集・記録集 縄文セミナーの会
澁谷昌彦 2008「塩屋式・木島式・中越式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
縄文セミナーの会 1994『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』資料集・記録集
縄文セミナーの会 2007『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』資料集・記録集
縄文セミナーの会 2011『第24回縄文セミナー 縄文前期土器研究の現状と課題』資料集
鈴木宏和2019「縄文時代前期初頭における燃糸側面圧痕紋土器の再検討 一花積下層式と上川名式の属性比較からみる遺跡間関係」『遡航 37』早稲田大学大学院文学研究科考古談話会 49-78
高橋雄三・吉田哲夫 1977「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物 一とくに早期末～前期初頭の土器群を中心として」『調査研究集録2冊』 65-99
宅間清公・小森曉生ほか 2023『井出南遺跡第2地点発掘調査報告書』山上雅信・株式会社東京航業研究所
田中和之 2008「羽状縄文系土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
谷藤保彦ほか 1985『中畦遺跡・諏訪西遺跡』馬県埋蔵文化財調査事業団
谷藤保彦ほか 1987『三原田城遺跡 八崎遺跡・八崎塚 上青梨子古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団
谷藤保彦 1988「二ツ木式土器」『群馬の考古学 一創立十周年記念論集 一』群馬県埋蔵文化財調査事業団
谷藤保彦ほか 1993 a『芝山遺跡』北橋村教育委員会
谷藤保彦 1993 b「群馬県内出土の早期末から前期初頭土器」『縄文時代4号』縄文時代文化研究会
谷藤保彦 1994「群馬県における早期末・前期初頭の土器」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』資料集・記録集
谷藤保彦 1997「縄文時代前期「二ツ木式土器」の様相」『双葉(乾) 双葉町史別冊Ⅰ』福島県双葉町教育委員会
谷藤保彦・関根慎二 1999 a「列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望(1) 一関東地方 前期」『縄文時代10 第1分冊』縄文時代文化研究会
谷藤保彦 1999 b「花積下層Ⅰ式土器とその周辺」『縄文土器論文集 一縄文セミナー十周年記念論文集 一』六一書房
谷藤保彦 2002「群馬県における二ツ木式土器」『地域考古学の展開 一村田文夫先生還暦記念論文集 一』村田文夫先生還暦記念論文集刊行会
谷藤保彦 2005「表館式土器に関する一考察 一広域分布からみた視点 一」『北奥の考古学 一葛西 励 先生還暦記念論文集 一』葛西励先生還暦記念論文集刊行会
谷藤保彦 2006 a「二ツ木式から関山式への土器文様の変遷と異系統土

- 器」『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』資料集・記録集
縄文セミナーの会
- 谷藤保彦 2006b「周辺地域における塚田式土器」『長野県考古学会誌
118 樋口昇一氏追悼号』長野県考古学会
- 谷藤保彦 2007a「茨城県における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古
学の深層 一瓦吹堅先生還暦記念論文集一』瓦吹堅先生還暦記
念論文集刊行会
- 谷藤保彦 2007b「前期前葉におけるコンパス文の発生と系譜」『列島の
考古学Ⅱ 一渡辺 誠 先生古稀記念論文集一』渡辺 誠 先
生古稀記念論文集刊行会
- 谷藤保彦 2011「前期前半期における土器研究の展望」『第24回縄文セミ
ナー 縄文前期土器研究の現状と課題』資料集 縄文セミナー
の会
- 谷藤保彦 2013「関東北西部における前期前葉の様相」『縄文前期前葉の
甲信地域 一山梨からみた中越式期一』山梨県考古学協会
- 谷藤保彦・高橋清文・伊藤順一 2014「縄文時代前期前葉の「コの字形石
敷」」『研究紀要32』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 2019「群馬県内における縄文時代前期の異型式土器」『研究紀
要37』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 2020「布目式土器の周縁 一群馬県内への広がり」『研究紀
要38』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 長沢宏昌 1996「第3節 縄文時代早期末～前期初頭の土器について」
『中溝遺跡 揚久保遺跡』山梨県教育委員会
- 長沢宏昌ほか 1999『原平遺跡』山梨県教育委員会
- 賛田 明 2008「塚田式・中道式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモ
ーション
- 古谷健一郎 1984「神之木台式・下吉井式土器の変遷」『丘陵 11』甲斐
丘陵考古学研究会 45-66